

「生」と「死」を考えてきたつもりはこの連載ではありますが、世の中の出来事はその思考という行為を断絶してしまう勢いで襲ってくる場合があります。

その「死」がもたらすものは、「なぜ」という問いの反復です。「その人にとってそれが死の「時機」だったといえるのか」「その死はその死にかかわっている人々に何を意味しているのか、何をもたらそうとしているのか」「その生は何だったのか」「なぜ、“その人”だったのか」等々。

事故や事件に誰もが遭遇する可能性があるとはいえ、それを見たり聞いたり、そして読んだりしている私たちはその“現実としての事実”とどのように向き合えばよいのでしょうか。

生死の世

●長崎県警は7月27日、長崎県佐世保市の高校1年の女子生徒(15)を工具で殴るなどして殺害したとして、同じ高校の同級生の女子生徒(15)を殺人容疑で逮捕した。遺体は女子生徒が1人で住むマンションの室内で見つかり、頭部と左手首が切断されていた。女子生徒は「すべて私が1人でやりました」と容疑を認めており、県警が経緯や動機を調べている。(「高1同級生殺害：遺体の一部切断 女子生徒逮捕 佐世保」『毎日新聞』2014年7月28日参照)

●東京都西東京市で自殺した中学2年の長男(14)が父親から暴行されていた事件で、傷害容疑で逮捕された父親(41)が、自殺前に行った暴行の直後、長男に「24時間以内に首でもつって死んでくれ」と迫っていたことが1日、捜査関係者への取材で分かった。警視庁田無署は長男が自殺するきっかけになった可能性があるとして詳しい経緯を調べる。(「『24時間以内に死んでくれ』傷害容疑で逮捕の父親、自殺直前、中2長男に迫る」『産経新聞』2014年8月1日参照)

●京都市伏見区で自営業の60代の夫婦が死亡した連続不審火について、府警は火災が半径400mの範囲に集中し、15分程度の間相次いで出火していることから、連続放火の可能性が高いとみて1日、伏見署に特別捜査班を設置し、50人態勢で捜査を始めた。(「京都・伏見、半径400mで15分の間火災相次ぐ 伏見署が特別捜査班を設置」『産経新聞』2014年8月2日参照)

●3日午前4時15分ごろ、大阪府枚方市香里ヶ丘の集合住宅敷地内で、少年が倒れているのをランニング中の男性が発見、近くの交番に通報した。少年は全身を強く打っており、搬送先の病院で死亡が確認された。(中略)同署は生徒が飛び降り自殺した可能性が高いとみて詳しく調べている。(「高1男子が飛び降り自殺か 大阪・枚方の集合住宅 踊り場には遺書めいたメモやリュックサックも」『産経新聞』2014年8月3日)

長崎県佐世保市で発覚した高校1年同級生殺害事件は特に注目され、続報によって私たちは加害者少女の言動を少しずつ知っていきます。同時に知ればその分だけ、人間の持つ不可思議さに当惑するような感じもしています。

佐世保市では2004年6月に市立大久保小学校で6年生の女児(当時11歳)が同級生の女児を殺害した事件の後、小中学校が地域と連携して、命の大切さを学ぶ教育活動に力を入れてきました。佐世保市は、6月を「いのちを見つめる強調月間」

と定め、命をテーマにした講演会や自然の中での体験学習などを実施してきていました(『毎日新聞』2014年7月30日参照)。

事件から10年後に起きた同様の事件。テレビでインタビューに答えたある住民の「なぜ佐世保でばかり…」という言葉が耳に残ります。

世界では、マレーシア航空機の2度にわたる事件がありました。マレーシア航空では、3月に乗客乗員239人が乗った北京行き航空機が行方不明になり、7月にはウクライナ上空で撃墜されて約300人が犠牲になりました。またイスラエルのガザ侵攻では、ガザ地区で1,650人が死亡(8月2日報道)、国連が住民の避難所として開放している学校に砲撃があり、少なくとも19人が死亡(7月31日報道)。女性や子どもを含む一般市民が犠牲になっています。

さらに、台湾澎湖島で旅客機が着陸に失敗し墜落、乗員乗客58人のうち、42人が死亡、10人が負傷、6人が不明(7月24日現在)となりました。台湾南部の高雄市では、8月1日未明、大規模なガス爆発が発生し、28人が犠牲となり、300人近くが負傷しました。

また、ナショナルジオグラフィック日本語公式サイトは、「2014年の春に西アフリカの山林でサルから狩猟者に感染したと考えられるウイルスが、今や同地域の3カ国で手に負えない事態に発展し、世界を巻き込んだ危機になるおそれも出てきた。」とエボラ出血熱の猛威を報道しています(8月4日)。ギニア、シエラレオネ、リベリアでこれまでに報告された症例は1,322件、死者は728人に達し、リベリアから出国した男性がナイジェリアで死亡、シエラレオネでは感染対策を主導していたシーク・ウマル・カーン(Sheik Umar Khan)医師が亡くなっています。

世界のここかしこで発生する事件や事故。それを見聞きして、「なぜ」「どうしてこのようなことが起こるのか」と誰もが考えるでしょう。原因を探り、何らかの答えを求めます。そして対策も講じてきました。それでも、納得し難い「死」とは常に隣り合わせです。

8月3日、NHKは「代理出産で障害児 引き取り拒否に議論」というニュースを伝えました。タイ人の女性が代理出産した男児に障害があったため、依頼したオーストラリア人の両親が子どもの引き取りを拒否したというものです。双子の男女の赤ちゃんのひとりとして出生した男児はダウン症に加え、先天性の心疾患などがあり、出産したタイ人の女性が引き取り、自分の子ども2人と共に育てているということです。彼女は「愛しており、見捨てることはできませんでした」と話しています(<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20140803/k10013507601000.html>参照)。

この男児は産みの母に救われましたが、貧しさゆえに代理出産した彼女が、貧しさゆえに彼を引き取らないという態度であったなら、彼のいのちはどうなったのでしょうか。“生まれさせた”生(いのち)は、納得できない死と同様の問題を提起しているように思われます。(タイ人女性は窮状を報道関係者に語ったことがきっかけとなって寄付金が集まり、男児の医療に希望が見えてきたようです。)